



早稲田大学政治経済学部卒業。ハーバード大学、ロンドン大学に留学し、PhD in Law取得。米欧の法律事務所勤務後、国連難民高等弁務官（UNHCR）事務所法務官、国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）人権担当官、名古屋大学大学院教授などを経て、2004年から東京大学大学院教授。長島・大野・常松法律事務所顧問

# 新しい政治体制と「人財」育成に支援必要

企業も民主化と人権尊重に貢献を

東京大学大学院総合文化研究科「人間の安全保障」プログラム  
グローバル地域研究機構・持続的平和研究センター 教授／副センター長

佐藤 安信氏

長期化するミャンマーの紛争と混乱に対し、国際社会と日本にできることは何なのだろうか。開発法学など法律専門家の立場から、人間の安全保障や平和構築、難民問題などを研究している東京大学大学院教授の佐藤安信氏に聞いた。

（聞き手：本誌編集委員・竹内 幸史）

## タイ北部にあふれ出る避難民

——この年末年始にタイに出張し、ミャンマーからの避難民の様子を最前線で調査されたそうですね。

バンコクからタイ北部のメソト、チェンマイなどを約2週間巡ってきた。メソトはタイのミャンマー国境の町で、近くにはカレン人難民が多いメラ難民キャンプもある。

メソトの街では、ミャンマー伝統の天然化粧品「タナカ」を顔につけた女性が多くいる。タイ語よりミャンマーの言葉の方が通じるため、住民の半分くらいはミャンマー人ではないかと思うほどだ。

今回はちょうど、ミャンマー側の国境近くのレーケーコー村が国軍の攻撃を受け、避難民が増えていた。ミャンマーの移民労働者たちが避難民に1,000食ぐらい食事を炊き出し、トラックで国境の検問所まで運び込んでいた。

難民のために診療所を運営し、

マグサイサイ賞を受賞したカレン人医師、シンシア マウン院長のメータオ・クリニックも訪問した。そこにはクーデター後の避難民らもいたので、話を聞いた。

メソトから米国などに難民として受け入れられる避難民もいて、米国大使館が対応しているようだった。しかし、避難民から日本への受け入れを求める声はあまり聞けなかった。日本政府も何か緊急人道支援ができないものか、と思ったが、タイ政府側の了解がなければ、外交的には難しいだろう。

医療や教育の人道支援では、多くのNGOが活動している。日本からはシャンティ国際ボランティア会（SVA）が絵本を使った幼児教育などに取り組んでいる。

日本で難民認定された知人の案内で国境地帯を訪ねてみた。石を投げたら届くような幅5～6メートルの小さな川に沿って国境がある。川の向こうはミャンマーで、

中国が作ったというカジノが立ち並ぶ。タイから川を渡ってカジノに行き、遊んで帰って来るというビジネスが成り立っているようだ。

レーケーコー村では日本財団が避難民に建てた住宅設備にも被害が出たというが、近くにあったチャイナタウンは無傷だったという。そこはギャンブル場で、中国の経済特区（SEZ）もあり、紛争当事者の利権になっているようだ。

カンボジアのシアヌークビルにも、チャイナタウンやカジノホテルが乱立する。中国内の取り締まりを逃れ、ギャンブルを隠れ蓑にしたマネロン天国になっている。中国の「一带一路」で地下経済も周辺諸国に拡散しているようだ。

長年、国境で難民救済をしている方によると、和平プロセスも実はカモフラージュで、その裏で色々ビジネスがあるという。少数民族地域では原料を輸入して覚醒剤を密造し、国軍も含めて敵、味